The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | 初期ハイデガーにおける実存と憂慮について |
| Author(s) | 西村, 知紘 |
| Citation | 待兼山論叢. 哲学篇. 2018, 52, p. 55-71 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/76063 |
| rights | |
| Note | |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

# 初期ハイデガーにおける実存と憂慮について

西村　知紘

キーワード：ハイデガー／ナトルプ報告／憂慮／迂回路

## 序

ハイデガーの主著『存在と時間』は、現代の哲学に多大な影響を与えたにも関わらず、未完に終わった著作であるため、いまだに様々な問題が残されており、研究者による議論が続いている。本稿ではそのうち、本来性の問題について考察する。『存在と時間』における本来性の記述は非常に難解で、本来的実存の内実がいかなるものであるのかを理解することは困難である。そこで本稿では『存在と時間』以前にハイデガーによって書かれたテキストを参照し、そこで使われている「迂回路」という用語の意味に着目して『存在と時間』の本来性概念の理解に役立てることを目的としている。

本稿で主として取り扱うのは1922年秋に成立したとされるテキスト「アリストテレスの現象学的解釈」である。これはハイデガーがフライブルク大学において私講師として働いていた時代に、マールブルク大学のパウル・ナトルプに送った自らの研究内容についての報告であり、研究者の間では一般に「ナトルプ報告（Natorp-Bericht）」と呼ばれてきたもののことである。（以下「ナトルプ報告」と略す。）このテキストは「アリストテレスの現象学的解釈」という題名がつけられていながら、実際にアリストテレスの著作についての考察が行われているのは本文全体のうちの半分に満たない。残りは序論とでも言うべき内容で、人間、この時期のハイデガーの用語で言うと事実的生（faktisches Leben）の分析がなされており、ここに『存在と時間』の現存在分析の原型を見ることが可能である。本稿がまず注目したいのはこの「ナ

トルプ報告」における気遣い（Sorge）とそれと関連して導出される憂慮（Bekümmerung）の概念である。

周知のとおり『存在と時間』では、現存在の存在が「気遣い」として取り出され、内世界的存在者とのかかわりにおける気遣いを「配慮（Besorgen）」、他の現存在との共存在にかかわる気遣いを「顧慮（Fürsorge）」と呼び、この二つは気遣いの様態として規定される。これに対して「ナトルプ報告」では顧慮に当たるものは用語的にも内容的にも登場しない。気遣いと配慮は、このテキストにおいても特別な意味を込めて用いられているが、それに加えて憂慮（Bekümmerung, bekümmern）、心配（Besorgnis）という用語が用いられている。注目すべきはハイデガーが「ナトルプ報告」において『存在と時間』の本来性と対比可能なかたちで用いられるのは、気遣いではなく、憂慮の方だという点である。[1)]

この点からも推察されるように、気遣いと配慮の二つの意味については『存在と時間』と完全に一致するわけではない。従って本稿第1節では「ナトルプ報告」における気遣いと配慮の意味を確認することから始める。続いて第2節では、「ナトルプ報告」での心配と憂慮の概念を考察する。第3節では、前の二節で規定された四つの概念をもとにして、「ナトルプ報告」では本来的実存が「迂回路」を通って獲得されると考えられていることを明らかにする。最後に第4節では、「ナトルプ報告」での「迂回路を通る」という考え方が、『存在と時間』の本来的実存の考え方にも見て取れることを明らかにする。

## 第1節　気遣いと配慮

本節では気遣いとそこから派生する配慮の概念について考察する。ハイデガーは「ナトルプ報告」において気遣いを以下のように説明する。

> 事実的生の動性の根本意味は気遣い（curare）である。何かへ向かって、気遣いつつ欲していることのうちに、生の気遣いの向かう先、すなわち

そのつどの世界がそこにある。気遣いの動性は事実的生が自らの世界と交渉するという性格を持っている。気遣いの向かう先が交渉の対象である。世界の現実存在や現存在の意味は配慮的交渉の対象である世界の性格に基づき、そこから規定される。世界はすでに常に何らかの形で気遣いのうちへ取り入れられた（立てられた）ものとして現に存在する。（GA62, 352）

気遣いが事実的生の動性の「根本」意味であると述べているところを見ると、『存在と時間』における気遣いと同様に考えてよいようにも思われる。しかし、注意しなければならないのは、次の文において、気遣いの向かう先（Worauf der Sorge）が世界であると述べている点である。ドイツ語で「～を気遣う」と言うときに名詞のSorgeや動詞のsorgenが取る前置詞はumである。したがってここで「気遣いが気遣っているところもの」が世界であると言おうとしているのであれば、「Worum der Sorge」となるはずである。テキストに即して言えばこのWorauf のaufという前置詞は、その前の文中の「気遣いつつ何かを欲するsorgendes Aussein auf etwas」という表現からきていると考えるべきである。つまり、気遣いは世界を気遣っているのではなく、別の何かを気遣いつつその気遣いゆえに世界を欲しているということである。気遣いの対象は後で詳述するが、生自身の実存のことである。したがって実存を気遣いつつ、気遣いの結果として世界へと向かっているということである。

次に配慮は以下のように規定される。

配慮の動性は交渉の遂行の仕方や交渉がその対象（Womit）と関連付けられていることの多様な仕方を示している。…を扱う、…を調達する、…を製作する、…によって確保する、…を使う、…のために使用する、…を所有する、保存する、喪失してしまう。（中略）。気遣いの交渉はその気遣う対象をつねにある特定の視のうちでもっている。交渉のうちで生き生きとしており、交渉と共に時熟し、交渉を導くのが配視（Umsicht）

> である。気遣いは見回すことでありながら、同時に配視の形成、すなわち交渉の対象との親しみを確保し高めることを配慮している。（GA62, 353）

配慮は世界への気遣いではありながら、世界の内部にある物との交渉にその視点が集中している。つまり配慮の配視は世界のとの交渉が円滑に行くようにその対象をより上手く使えるように配慮するという可能性をもっている。

こうした世界との配視による交渉が、時として存在者を物として、つまり眼前的存在者として見るように変容することがあるという分析は、『存在と時間』における世界性の分析と同じである。しかしながらその眼前的存在者への変容の位置づけや説明が『存在と時間』とは少し異なっている。『存在と時間』では道具連関が途切れたときに、その道具が眼前的な存在者として目立ってくるという説明をしている。ところが「ナトルプ報告」ではこの点について以下のように述べている。

> 気遣いの交渉は業務を果たす（Ausrichten）気遣いを放棄するということを単に可能性として持っているだけでなく、事実的生の根源的な動性の傾向においてそこへの傾きを持っている。配慮的交渉の傾向がこのように遮断されることにおいてこの交渉は用務を果たし業務を行うことを目指さない単なる見回しとなる。この見回しは…を単に見やる（Hinsehen auf）という性格を獲得する。（GA62, 353）

ここでは、『存在と時間』では眼前的存在者への見やりといわれるような人間の態度が、単に偶然的な形で生じてくるのではなく、人間がその存在の傾向性においてそもそもこうした見やりへの傾向を持っているということが述べられている。この見やりの気遣いはここでは好奇心（Neugier）と言い換えられている。この好奇心にとって世界は外観（Ausshen）への観点のうちで現にある。この外観という用語は、この箇所では特に言及されていないが、

ギリシャ語のエイドスを意図して使っているものと考えてよいだろう。エイドスという観点において対象を規定することによって学問が成立する。つまり人間は世界の中で出会ってくる対象に対して、学問的な見やるという仕方で交渉することをその動性の中に含んでいるということである。

## 第2節　心配と憂慮

前節では「ナトルプ報告」における事実的生の根本的動性である気遣いと配慮について確認した。本節では「ナトルプ報告」において気遣いと関連して重要な概念として取り上げられる憂慮[2)]と憂慮と対比的に説明される概念である心配（Besorgnis）を立ち入って考察することで、その性格をより明確なものとしたい。

まず心配についてであるが、これは「ナトルプ報告」よりも「ナトルプ報告」とほぼ同時期、1921/22年冬学期に行われた同じ題名の講義「アリストテレスの現象学的解釈」でより明確に記述されている。そこでまずこの講義での規定を確認しておこう。

> 配慮されているものとしてのこの気遣いを我々は心配（Besorgnis）と規定する。心配のうちでは気遣いの十全な動性が自ら自身へといわば投入され、すなわち気遣い自身の動性が気遣い自身によって動かされるのである。（GA61, 136）

ここで言われていることを解釈すると次のようになるだろう。人間はその根本的な動性において世界への気遣いであるが、この気遣いが高まっていくにしたがって、気遣い自身が気遣われるようになる。つまり世界のことに気を使いすぎるあまりに、この世界に気を使いすぎていること自身が気にかかってくる。このことをハイデガーは心配と呼んでいるのである。注目すべきは、気遣いと配慮が主に世界や世界の内にある存在者に向かう気遣いであったの

に対して、心配においては自己への関係性が表立ってきているということである。なぜなら気遣いを気遣うということは、そのように気遣っている自分の労を気遣っていることに他ならないからである。

しかしながらハイデガーは心配の現象における自己への関係性について留保をつけている。

> すなわち気遣いは、気遣い自身に関して、動性を生きた気遣いのうちに取り入れている。気遣いはその遂行意味のうちで、（その動性とともにその十全な意味と存在性格において）気遣い自身を目指しているということがそのうちに表現されている。「それ（es）［＝気遣うこと］」自身を目指してであるが、必然的に「自己（sich）」自身を目指してであるわけではない。「それ」という言葉の使用で告示されているべきであるのは、気遣いが自己自身を気遣いのうちに取り込んでいるこの場所では、気遣いのうちへと取り入れられたこの気遣いは世界的に出会って来るということである。（GA61, 135）

気遣いを気遣うところの心配は確かに気遣っている自分自身を気にかけているのではあるが、そこで気遣っている自分は世界的な自分のことである。つまり世界の中である活動をしている際に、その活動の中で自らに降りかかるあれこれの気苦労のことを気遣っているのであって、それが本当に自分自身のことを気遣っていると言えるかどうかは分からないということである。

「ナトルプ報告」においても心配は、世界的な気遣いのことを述べている。

> 自らの死をめぐる生の気遣いの強いられた無頓着さ（Unbekümmertheit）が世界的な心配への逃避のうちで遂行される。（GA62, 359）

死は常に生に迫っているという形で現存している。人間の生はこの死へと気遣うことから逃れるためにこの気遣い自身を気遣うという形で世界の内での

活動で気を紛らわすことによって存在する。またこうした心配が自らの死に対する無頓着、つまり憂慮（Bekümmerung）の否定として規定されていることから、心配と憂慮が対置的な関係にあることがわかる。

心配のこうした傾向は『存在と時間』で術語として用いられる以前に「ナトルプ報告」において既に「頽落（Verfallen）」として規定されている。

> 心配のこの傾向は生が自ら自身から離反し、そこで世界へと頽落し、この世界のうちで自ら自身が崩壊することへと向かう事実的根本傾向の表現である。（GA62, 356）

現存在が自ら自身のことを気遣っていながら、自ら自身から離反して世界へ頽落し、崩壊するという説明は一見逆説的であるが、上述した心配という現象から理解することが可能になる。人間の生は自ら自身を気遣っているのであるが、自ら自身への気遣いは、時として気遣っていること自身を気遣うということになる。気遣いをしなくてもいいようにと世界の事柄に我を忘れて没頭し、すなわち世界へと頽落することで、もともとの気遣いを覆い隠してしまうということがあり得る。このときには、もともとは自ら自身を気遣っていたにも関わらず、その反対に自ら自身を失ってしまうということになるのである。頽落傾向における人間の生は、自らの外にある世界によって翻弄されて自らを失っているのではなく、逆に自己の存在を心配することによって、あえて「世界によって自らを連れ去らせる（Sichmitnehmenlassen）」ということをしているのである。

『存在と時間』では頽落しつつ存在することが非本来性であり、本来的実存と対立するものとして規定される。一方「ナトルプ報告」では、本来性と非本来性という表現は用いられず、事実的生の頽落傾向に反対するものとして憂慮という概念が導入される。

> 死から目を背けることはしかし生をそれ自身において掌握することでは

なく、むしろ生が自ら自身と自らの本来的存在性格を回避することである。逃避する心配またはつかみ取る憂慮（zugreifende Bekümmerung）という仕方で死を目前に迫っているものとして所持することが事実性の存在性格にとって構成的である。確実な死をつかみ取って所持することにおいて生はそれ自身において見えるようになる。（GA62, 359）

死に無頓着になっていることで、死の反対として生が際立って来るのではなく、むしろ死に手を差し出すことによって生が目に見えるようになる。なぜなら死への無頓着自身は、生が失われてしまうという生の憂慮に由来し、そうした根源的な憂慮から逃れるという形で隠してしまうのに対して、憂慮においては自らが何を巡って憂慮しているのかが明らかになるからである。

## 第3節　実存の獲得と憂慮

前節において、気遣いと配慮、心配、憂慮の四つの概念がそれぞれ明らかにされた。この成果をもとに本節では、「ナトルプ報告」においては、いかにして本来的実存が獲得されると考えられていたのかを明らかにしたい。

第1節で気遣いとは自己の実存のことを気遣いながら、世界を欲するという構造を持っていると述べた。これは一見すると実存が目的で、世界が手段であるかのように見える。つまり世界で何かを行うことによって自分自身が達成されるというような考え方である。むしろ事態は反対であって、世界で何かを行うことによって自己自身からは離れていくという性格を持っているのである。

そうだとするといかにして自己の存在を失うことなく存在することができるのだろうか。この点を理解するための鍵となるのは「迂回路（Umweg）」という概念である。ハイデガーは、生それ自身は迂回路を通ることによって、眼に見える形になると考えている。そのことを述べている箇所は以下である。

> 事実性自身のうちで接近可能となる生それ自身の存在は頽落的気遣いに抗する反対運動を通る迂回路においてのみ見えるようになり、到達可能になる。生が喪失されないようにと憂慮するこの反対運動は生の可能な掌握された本来的存在が時熟する仕方である。（GA62, 360f.）

生は気遣いという根本的な動性を持っており、この動性は世界へと頽落する傾向を持っている。したがって、この頽落傾向に従って生きている限りにおいて、生それ自身が自らに見えるようにはならない。いわば流れに逆らって抵抗力を感じることで、その流れの強さを感じることができるように、頽落傾向そのものをとらえるためには、その頽落傾向に逆らうという回り道を通ることで初めて可能になるのである。

ハイデガーはこうした反対運動によって獲得される生そのもののことを「実存（Existenz）」と名付ける。ここでの実存が『存在と時間』における実存とは異なった意味において用いられていることに注意しなければならない。『存在と時間』における実存は、その存在者にとって「自らの存在が気にかかっている（es geht um sein Sein）」と表されるような、自らの存在へのかかわりのことを指している。現存在が自らの存在にかかわるという形で存在しているのは、特別な事例ではなく、現存在が存在する限りにおいて、何らかの仕方で自らの存在とかかわっているのである（vgl. SZ §9）。

それに対して「ナトルプ報告」では、実存は自らの頽落傾向に逆らうという特別な在り方をするときにはじめてとらえることができる自分自身のことである。この特別なあり方のことを「可能な掌握された本来的存在（das mögliche ergriffene eigentliche Sein）」と呼んでいることにも注意しなければならない。ここで見て取られている実存とは、あくまでも可能な存在として理解されているに過ぎない。ハイデガーは「実存が何であるかを直接的、普遍的な形ではそもそも問うことはできない」（GA62, 361）と消極的に述べている。そうだとすると、「ナトルプ報告」におけるハイデガーは何を目的としていたのだろうか。上記の引用に続く一節がその答えを与えている。

> それ［実存］がそれ自身において洞察のきくものとなるのは、事実性を疑わしくすることの遂行において、つまり事実性をその動性の動機、方向、意図的な使用可能性に向けてそのつど具体的に破壊することにおいてのみである。（ebd.）

ここで言われている動性の「動機」、「方向」「使用可能性」という言葉が「ナトルプ報告」冒頭に列挙される解釈の持つ三つの要素である「視線位置」、「視線方向」「視野」にそれぞれ対応することが分かる。つまり実存は、そのつどの具体的な事実的生を、解釈のこの三つの要素に関して明らかにすることによって把握されるのである。したがって実存は、頽落した事実的生において世界や伝統といった「迂回路」を通って接近可能になった実存の可能性のことである。ハイデガーはこの引用の個所の余白に以下のコメントを書き記している。

> もっと鋭くとること。…を通る迂回路は―その由来を保持している、すなわち、生はその存在の仕方のそれぞれにおいて歴史的である。生に「生ずること」、「生がそのつど存在するもの」は傾向（Hang）のうちを動き、その傾向のうちにぶら下がったままである。…へそして…のうちにぶら下がる傾向。（GA62, 360 Anm.）

つまり迂回路を通って接近可能になる生は、それが回り道を通っている分だけ気遣っているところのものを直接的に伝えることはないが、だからといって全く別のものになっているわけではなく、何らかの形でその由来を伝えているのである。

さらに実存を憂慮しつつも、実存そのものが何であるかが分からないという事実によってはっきりとしてくるのは、気遣いの持つ無力さという性格である。それは言語的に言えば、sorgenという動詞がとる「～の周りに（um）」

という前置詞のうちにも表れていると考えられる。つまり気遣いは実存のことを気遣っているのではあるのだけれども、直接的にその実存を獲得する方向へ向かわせるという効力を有していない。場合によっては、実存のことに思いを巡らせるだけで実質的には何もしないということがありうる。憂慮とは少なくとも現時点において、本来的な実存が達成されていないことについての憂いであり、そうした生のあり方が失われていくことへの憂いである。

頽落的傾向によって自己自身から離れて行ってしまうのであるとすれば、一見するとこの気遣いの中にとどまることが本来的な実存であるかのように思われる。しかし上で確認したように、気遣いが少なくとも日常的な生のあり方においては無力であるとすれば、その気遣いのうちにとどまったとしても何も解決されないということになる。そうだとしたら、いかにして現存在はこの実存を獲得するのであろうか。ここで再び「迂回路」という概念が重要となる。

> 事実的生は実存を憂慮したものとしては迂回的（umwegig）である。生の存在を憂慮して掌握する可能性は同時に実存を逸脱する可能性である。事実的生のそのつど可能な実存はその実存自身において逸脱する可能性があるものとして、生にとって根本的に疑わしいものである。（GA62, 361）

ここでハイデガーが用いる迂回路という概念と先に引用した箇所の迂回路との使われ方の違いに注意しなければならない。前者は生の存在が、頽落的気遣いに対する反対運動という迂回路を取ることで目にいれることができるようになるという意味において、いわば解釈の方法としての迂回路である。それに対してここでは実存を憂慮した生が、迂回路を通って現れてくるという、事実的生自身の迂回性を示している。ただし、この両者の迂回路は同じ道の見る方向の違いを示したものである。事実的生は、根本的には自己を気遣ったものでありながらも、世界へと頽落する傾向を持っている。ここでの世界

への頽落とは、ハイデガーが「ひとdas Man」や「伝統」と呼ぶように常識や伝統としてすでに身近にあるもののことである。人間はたいていは、こうしたいわば手持ちの概念を用いて自分自身を理解している。それゆえに、自己への気遣いはこうした歴史的なものを通して現れる。これが後者の迂回路である。迂回路を通ってくるがゆえに、実存はわかりにくいものとなる。それに対して、より根源的な自己自身を把握するために直接的にその自己自身を問うことはできない。なぜなら先ほど確認したように気遣いは基本的に実存に対して迂回的に現れるからである。そうだとすると可能なことはこの手持ちの概念を問うことによってそこに隠されている実存を目にとめるということにならざるを得ない。これが頽落に対する反対運動としての迂回路である。この作業が先ほど確認した事実性をその動機と方向と使用可能性に関して具体的に破壊することである。

## 第4節　『存在と時間』の本来的実存と迂回路

迂回路を通って本来的実存に到達するという発想自体は、『存在と時間』においても見ることができる。「迂回路（Umweg）」という言葉自体が使われているのはわずか（筆者の見る限りでは二ヵ所）であるが、そのうち一つは本来的実存に関する重要な個所で用いられている。『存在と時間』第68節「開示態一般の時間性」において、ハイデガーは了解、情態性、頽落、語りの時間性について述べるが、そのうち頽落の時間性について扱った個所で以下のように述べている。

> 現在の発源の時熟の様態は有限な時間性の本質に基づいている。死への存在へと投げられて、現存在はさしあたってたいていはこの多かれ少なかれ明瞭となって暴露された被投性を前にして逃避する。その現在はその本来的将来と既在性から発源するのであるが、それは自ら自身［現在自身］という迂回路を通って初めて現存在を本来的実存へと至らせるた

めである。現在の「発源」の根源、すなわち喪失への頽落の根源は死への被投的存在を可能にするところの根源的で本来的な時間性そのものである。（SZ, 348）

この引用の最初の二文では現存在の死に対する態度のことが述べられている。死に向かうことで現存在の有限性とともに全体性が明らかになるのだが、日常的な現存在は自らの死の可能性に臨んでそれから逃げるという仕方でこの可能性を覆い隠し、とるに足らないものと歪曲してしまう。この二文は第二編第一章ですでに述べられている内容の繰り返しであり、問題は次の第三文である。本来的将来と既在性から発源する現在というのは、死から逃避することを指している。つまり将来と既在性の本来性の中にあっても、日常的な頽落へと逃避するということがあり得るということである。しかもそれは、本来的実存に到達するために必要なことなのである。ここで発源と訳したEntspringenというドイツ語は通常「～に由来する」「～から生ずる」という意味とともに、「～から脱出する」という意味を持つ。ここでの現在の発源も、「根源（Ursprung）」から脱出するというイメージに近いと考えられる。つまり現在とは常に、根源から遠ざかることだとハイデガーはとらえている。しかしながら一方で現存在が本来的実存に達することができるのは、この現在を迂回路として通っていくことによってである。本来的存在が開示するような死や不安の前で現存在はたいていはそこから逃避することとなる。しかしながら「現在の発源の時熟の様態は有限な時間性の本質に基づいている」と述べているように、頽落している現在もまた根源としての時間性から離れていったものである以上はその根源に由来している。

さらに迂回路を通って達成される本来的実存は『存在と時間』においてもまた頽落的な傾向への抵抗運動という形をとると考えられる。それを示している点として以下の箇所を挙げることができる。

さしあたりたいていは、自己はひとのなかに紛れている。それはそのつ

どの今日的な「平均的な」現存在の公開的な被解釈性において「通用している」実存可能性にもとづいて自らを理解している。これらの可能性の多くはあいまいさによって見分けにくくなっているが、とにかくよく知られたものである。そして本来的な実存的了解は、引き渡された被解釈性から逃れることはなく、むしろそのつどその被解釈性から出発し、それに反対し、しかしながら再びそれのために、選択された可能性を決断のうちで掌握するのである。（SZ, 383）

この引用でハイデガーは本来的実存の了解が被解釈性すなわちひとによって解釈された頽落的な現在から出発しなければならないと述べている。そこで被解釈性に反対するということは、事実的な頽落のうちにありながら、頽落的な傾向に抵抗するということに他ならない。従って、ここでの考え方は「ナトルプ報告」における頽落傾向に対する反対運動という迂回路を通って実存に到達しようとするものと合致している。

本来的実存が迂回路をとって到達されるということが意味するのは、非本来的実存から本来的実存への変容が突然の変化のようなものではないということである。『存在と時間』のうちに見られる決断や覚悟性という表現は、気持ちを強く持つことのようにとらえてしまうと本来性を誤解することになってしまう。確かに『存在と時間』における本来的実存が瞬間的な決断という一面を持っていることは否定できない。しかし他方で、この決断が下されるためには一定の条件がそろっていなければならないということを見逃してはならない。良心の分析において「選択を選択することにおいて、現存在ははじめて自らの本来的存在可能を自らのために可能にする（SZ, 268）」と述べられているように、本来的実存の可能性自身がまずもって開かれなければならない。「迂回路」という表現は、事実的に頽落した現在のうちにありながら、それに抵抗するという運動を通してのみ本来的実存に達することができるという人間の生の性格を示したものである。

## 結語

最後に本稿の議論を振り返っておこう。「ナトルプ報告」においてハイデガーは人間の存在を気遣いのうちに見ていた。気遣いは一方で気遣い自身を覆い隠してしまう頽落的傾向を持っているが、他方で気遣いが実存に向かう時には憂慮として頽落傾向に反対する運動を可能性として有している。しかしあくまで失われていく自らの存在への憂慮である限りにおいて、頽落への反対運動は具体的な生のうちで迂回路を通るという形で遂行される。『存在と時間』における現存在の本来的実存もこの観点から考察されなければならないが、今回はその必要性を示したことで終わりとせざるを得ない。迂回的性格を考慮した場合、「先駆的覚悟性」としての本来性はどのように理解されるかについての考察は今後の課題としたい。

【注】

1) 本来性概念の発生源をどこに見るかは研究者の間でも諸説あるが、『存在と時間』と明確に対応可能な形で現れていると言えるのは、1920 年冬学期講義「宗教現象学入門」であるといえるだろう。そこでは聖書におけるキリスト教的な生のあり方に本来性の原型と言うべき内容を見て取ることが可能である。(齋藤、56 頁など)

2) 憂慮という概念自体は 1919 年から 1921 年の間に書かれたとされる「ヤスパース『世界観の心理学』へのコメント」(以下「ヤスパース書評」)において既にみられ(GA9, 32)、1920 年の「宗教現象学入門」講義においても使われているが、その概念の構造を最も明確に説明しているのは「ナトルプ報告」においてである。「ヤスパース書評」の成立した年については、言及されている書物の出版年などから 1920 年以降であろうと推測されている(全集版あとがき参照)が、本稿で着目した「憂慮」を含め、使用されている術語の観点から見ても 1920 年夏学期講義「直観と表現の現象学」までは使われていない語が見られるため、1920 年後半以降であろうと推察される。

【凡例】

『存在と時間』(M. Heidegger: *Sein und Zeit*, 19. Aufl.)からの引用は略記号SZの後に頁数を示す。ハイデガー全集からの引用は、略記号GAの後に巻号、頁数を示す。二次文献からの引用は著者の名前の後に頁数を示す。引用は邦訳のある著作については邦訳を参考にしたが、訳を変更したものもある。引用文中の括弧［　］は筆者による補足を示す。

【参考文献】

A.Cimino: *Phänomenologie und Vollzug*, *Heideggers performative Philosophie des faktischen Lebens*, Vittorio Klostermann, 2013

T.Kisiel: Das Entstehen des Begriffsfeldes „Faktizität“ im Frühwerk Heideggers, in: Dilthey-Jahrbuch 4, Vandenhoeck &Ruprecht in Göttingen, 1986/87, S.91-120

齋藤元紀：『存在の解釈学　ハイデガー『存在と時間』の構造・転回・反復』、法政大学出版局、2012 年

（大学院博士後期課程学生）

Zusammenfassung

# Existenz und Bekümmerung in der frühen Philosophie Heideggers

Chihiro NISHIMURA

Im vorliegenden Text versuche ich mit Hilfe der frühen Texte von Martin Heidegger die Bedeutung des Begriffs der „Eigentlichkeit“ bzw. des Begriffs „eigentliche Existenz“ in seinem Hauptwerk *Sein und Zeit* zu verdeutlichen. Im sogenannten *Natorp-Bericht*, den er 1922 schrieb, kann man eine Vorform von *Sein und Zeit* erkennen, aber die Bedeutungen der Begriffe sind in beiden Texten nicht die gleichen. Deswegen grenze ich zuerst die zwei Begriffe „Sorge“ und „Besorgen“ ab, da diese nicht nur im *Natorp-Bericht*, sondern auch in *Sein und Zeit* als zentrale Begriffe verwendet werden. In Bezug auf den Begriff der Sorge werden im *Natorp-Bericht* noch die Begriffe „Besorgnis“ und „Bekümmerung“ eingeführt. Besorgnis zeigt die Tendenz des Lebens auf die Welt, durch die es sich aus dem Weg geht. Bekümmerung hingegen meint die Bekümmerung darum, dass das Leben nicht verloren geht. Aus dieser Sicht ergibt sich, dass Besorgnis und Bekümmerung den Begriffen Uneigentlichkeit und Eigentlichkeit in *Sein und Zeit* entsprechen. Im Anschluss an diese Begriffsanalyse wird betrachtet, wie das Leben dem *Natorp-Bericht* nach seine Existenz gewinnen kann, ohne sich selbst durch seine „Verfallenstendenz“ zu verlieren. Dabei richte ich meine Aufmerksamkeit auf die Bemerkung Heideggers, dass die Gegenbewegung der Bekümmerung gegen die Verfallenstendenz ein „Umweg“ ist, auf dem man das Leben an ihm erreichen kann. Diesen Gedanken vom „Umweg“ kann man auch in *Sein und Zeit* finden. Der Umweg bedeutet, dass die Eigentlichkeit keine plötzliche Entscheidung ist, sondern eine Seinsart des Daseins, die erst durch die Bewegung gegen die Verfallenstendenz erreichbar ist, indem man das faktisch gegebene Leben auf seine Motive und Richtungen auslegt.